

# 天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る

## —キルギス共和国シャムシー渓谷の考古学調査(2025年)—

山藤 正敏 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員

下岡 順直 立正大学地球環境科学部環境システム学科教授

山内 和也 帝京大学文化財研究所所長

バキット・アマンバエヴァ キルギス共和国国立科学アカデミー歴史考古学民族学研究所研究員

## In Pursuit of Ancient Pastoral Nomadism in the Northern Foot of the Tien Shan Range: Archaeological Research in Shamsy Valley, Kyrgyz Republic (2025)

YAMAFUJI, Masatoshi Chief Researcher, Nara National Research Institute for Cultural Properties

SHITAOKA, Yorinao Professor, Department of Environment Systems, Faculty of Geo-Environmental Science, Risho University

YAMAUCHI, Kazuya Director, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

AMANBAEVA, Bakit Researcher, The Institute of History, Archaeology and Ethnology, National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic

### 1. はじめに

キルギス共和国北部に位置するチュウ渓谷東部には、6世紀におけるソグド人の進出に伴い建設されたシルクロード拠点都市の1つであるアク・ベシム(Ak-Beshim)遺跡が所在し、12世紀(カラハン朝)にかけて居住された。中央アジアではシルクロードの中世都市に着目した研究が盛んであり、当該地域においてもアク・ベシム遺跡と近隣の関連都市遺跡に長らく考古学調査の主眼が置かれてきた(e. g., Кожемяко 1959; 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所編 2020, 2021等)。他方で、中世都市周辺における遊牧民の活動はその痕跡が捉えにくいことも影響して、本格的な調査研究の対象とされたことがなかった。

こうした調査状況を念頭に、本研究はアク・ベシム遺跡周辺における古代の遊牧活動を明らかにし、都市定住民との相互関係を体系的に理解することを目的として、同遺跡南方にそびえる天山山脈の前山、キルギス・アラトウ(Kyrgyz Alatau)山脈北麓において2022年8月以降考古学調査を実施してきた。2022年にはケゲティ(Kegeti)渓谷において踏査を実施し、小型円形遺構をはじめとする多数の遺構が小谷に沿って分布する状況を確認した。2023年には、平坦面付き小型円形囲い込み遺構 KGT22002-2 において発掘調査を実施し、その構造を明らかにした(山藤他 2023, 2024)。2024年には、東隣のシャムシー(Shamsy)渓

谷に調査地を移して考古学踏査と楕円形囲い込み遺構 SMS24001-1 における発掘調査を実施するとともに、KGT22002-2 においても小規模な追加調査を行った。KGT22002-2 における光ルミネッセンス(OSL)年代測定の結果、同遺構が12~15世紀に利用された可能性が明らかになった(山藤他 2025)。これに続く2025年8月には、シャムシー渓谷の SMS24001-1 において再び発掘調査を実施した(図1)。以下では、2025年8月に実施した発掘調査成果の概要について報告する。

### 2. シャムシー渓谷 SMS24001-1 における発掘調査

シャムシー渓谷はキルギス・アラトウ山脈北麓を縦貫する主要な渓谷の1つであり、渓谷の中心にはシャムシー川が北の平野部に向かって流れる。2024年に実施した考古学踏査により確認した遺跡のうち、楕円形囲い込み遺構 SMS24001-1 の構造と年代を明らかにするために同年夏に発掘調査を開始した(図2)。これにより構造・基本層序は明らかになったが、①遺構北部における出入口の有無、②内庭中央の浅い窪地の範囲、③表土下の暗灰褐色土の広がり、を確認する目的で2025年8月に追加調査を行った。

調査にあたっては、昨年と同様に UTM 座標(Zone 43N)に基づく2m四方のグリッド・システムを遺構全体に適用した。遺構の南北方向の中軸線より東側を調査対象とし、中軸線に沿うかたちで遺構の北半部を縦断する調査区(北区 Area N、14m×2m)を設定し

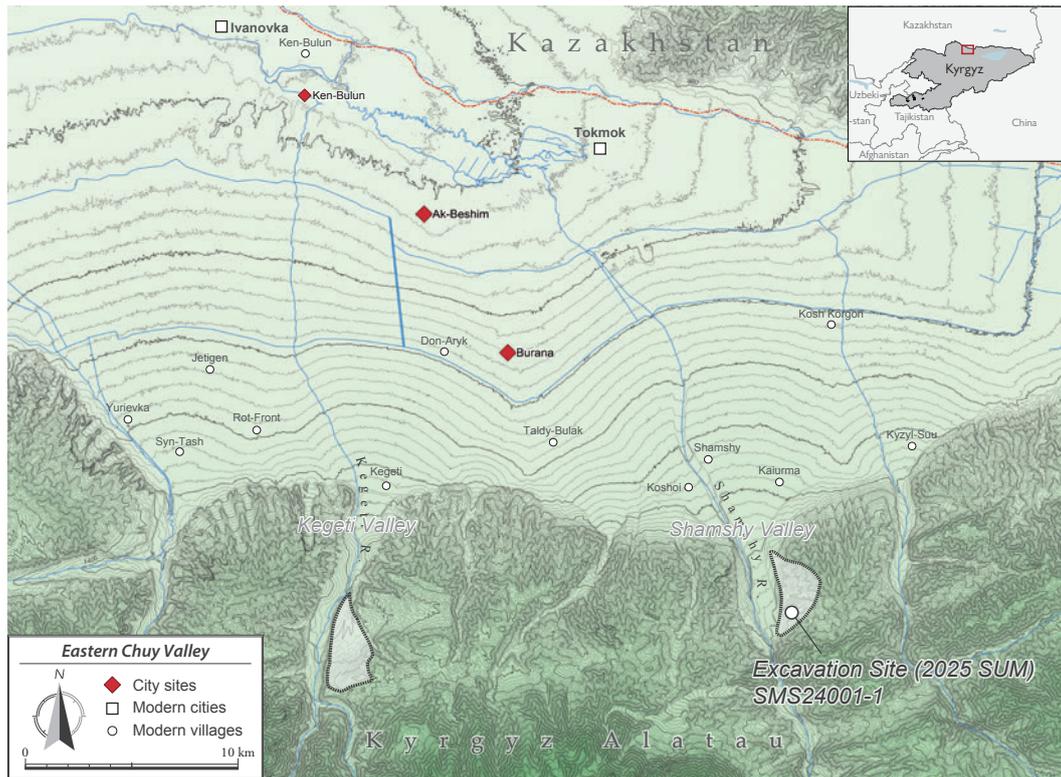


図1 調査地位置図

た(図2)。この北区の南端部は、前回調査において遺構中央東側に東西方向に設定した調査区(中央区 Area C、12 m×2 m)の西端部幅2 mに接続する。基本土層は昨年確認したものとほぼ変わらないが、表土直下に遺物包含層である漸移層を認めた点が大きく異なる。したがって上から、表土(5 cm)、灰褐色土(漸移層、5~10 cm)、暗灰褐色土(10~20 cm)、明黄灰色シルト(自然堆積土)である。

北区の発掘調査により、同遺構北半部の構造が明らかになった(図3)。遺構の基本構造は外側から、外周を廻る土塁、その内側の周溝、周溝より内側の内庭から成ることは既に確認済みであったが、遺構北端は土塁・周溝を伴わず「陸橋」状に開口していた。この「陸橋」が当初から造り付けられたものなのか、あるいは後世に埋め立てられたものなのか、明らかにする必要があった。北区の発掘調査の結果、北部には土塁も周溝も存在することが判明した(図4)。土塁は幅2.6 m以上、現況で高さ0.2 mを測り、中央区において既検出の土塁と同様に、周溝掘削時の自然堆積土を盛り上げて構築されたと考えられる。この南(内)側の周溝は、上端で幅2.0 m、下端で幅0.75 m、深さは最大で0.6 mを測る。明確な断面逆台形を示していた中央区の周溝とはやや異なり、攪乱の影響もあって断面

形は不明瞭である。周溝埋土最上層には、自然堆積土由来と考えられる明黄灰色シルトが10 cm程度堆積していたが、これは後世に盛土が切り崩されて埋め立てられたものと考えられる。したがって、「陸橋」は後世に埋め立てられたものであることが判明した。

周溝内側の北区中央部の内庭には、遺物包含層である灰褐色土がほぼ平坦に堆積しており、遺構は認められなかった。北区南部では、前回調査時に一部確認した浅い窪地を検出した(図5)。この窪地の全貌は不明であるが、検出した範囲は長軸5 m及び短軸1.8 m、深さは10~17 cmであり、SMS24001-1と相似を成す楕円形を呈していた可能性もある。この楕円形窪地は遺物包含層である灰褐色土を切り込んで造られていたが、灰褐色土に含まれる遺物との相違がほとんど認められないことから、灰褐色土の堆積よりも少し後の時期に位置付けて差し支えないであろう。

上記に加えて、表土及び遺物包含層(灰褐色土)直下に堆積する暗灰褐色土の広がりを確認する目的で、中央区の東方約3 mの遺構外に小調査区(東区 Area E、東西1.2 m、南北1.0 m)を設けて、土層の堆積状況を確認した。基本層序は上から、表土(5 cm)、暗灰褐色土(25~30 cm)、明黄灰色シルト(自然堆積土)であり、暗灰褐色土と自然堆積土の間に一部、灰及び黒化

天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る—キルギス共和国シヤムシー渓谷の考古学調査(2025年)—

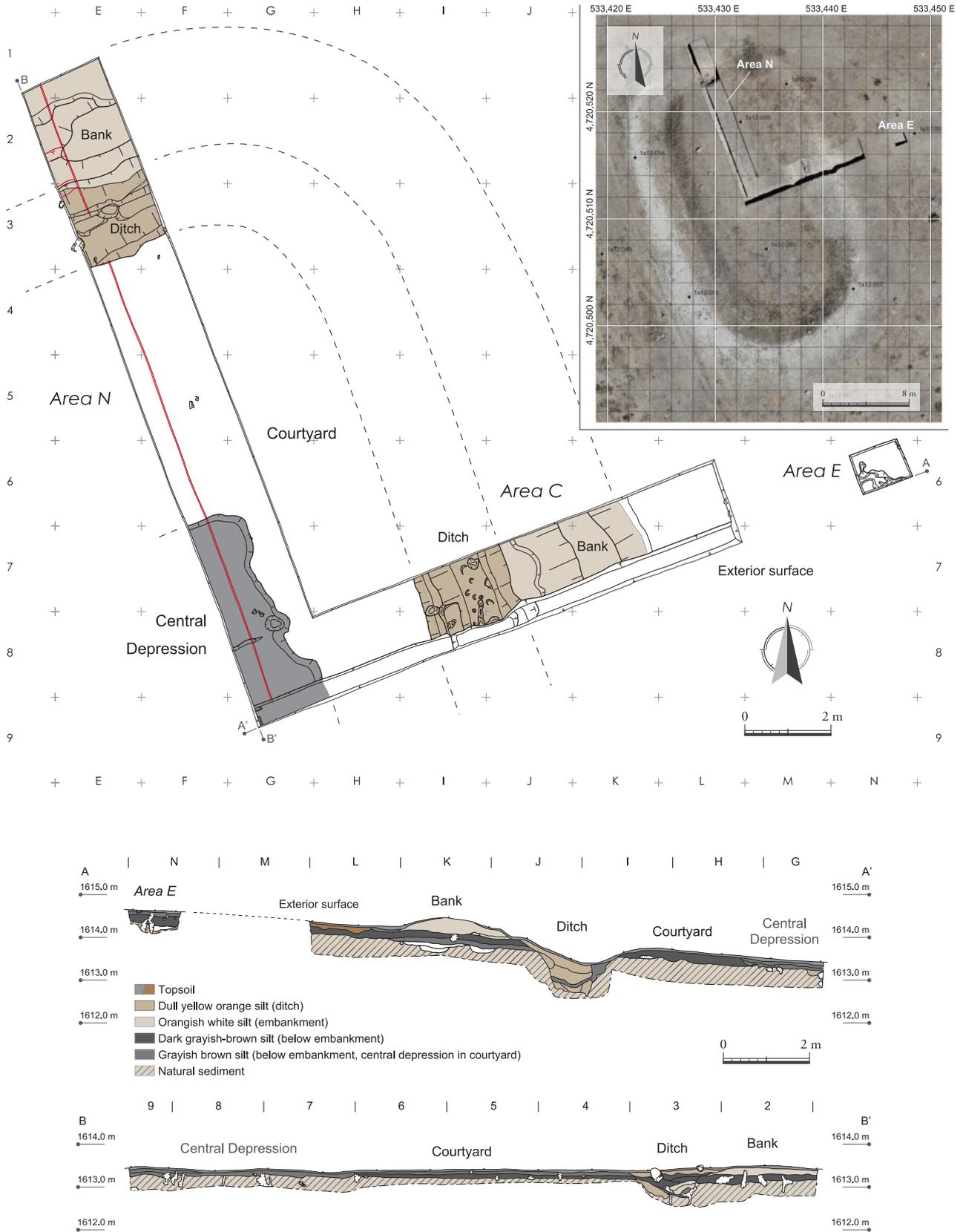


図2 SMS24001-1 全体三次元オルソ画像・平面図・土層図



図3 SMS24001-1 北区全景(北から)



図4 SMS24001-1 北区周溝(東から)



図5 SMS24001-1 北区楕円形窪地(南から)

した焼土(?)混じりの明褐色砂(10 cm 程度)が見られた(図6)。したがって、遺構内で堆積が認められた暗灰褐色土は遺構外にも続いていることが判明し、同層が自然堆積である蓋然性が高くなった。なお、東区ではいかなる遺構も認められなかった。

また、上記遺構の年代と機能を同定する目的で、中央区の南壁土層より土壌サンプルを採集した。2025年12月現在、これらの試料に対しOSL年代測定、環境DNA分析、炭素・窒素同位体分析、粒度分析を実施中である。

### 3. SMS24001-1 北区・東区の出土遺物

北区及び東区の調査では、計163点の土器片が出土



図6 SMS24001-1 東区南土層堆積状況(北西から)

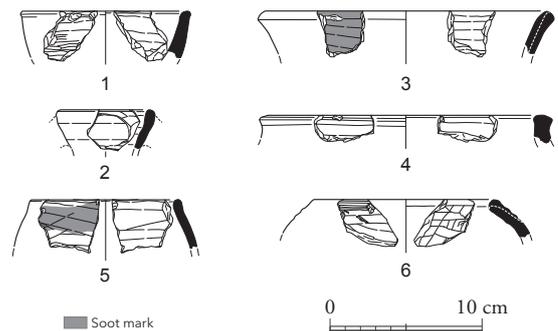


図7 SMS24001-1 北区・東区出土土器(北区：1, 2, 4, 5；東区：3, 6)

した(図7)。北区からは144点が出土しており、このうち106点は内庭の灰褐色土、7点は中央部の楕円形窪地からである。この他、27点は内庭・土塁の表土から出土した。東区からは計19点が出土し、このうち11点は下層の明褐色砂に由来する。胎土の質感(精製・普通・粗製)に基づくと、昨年発掘を行った中央区と同様に、粗製が112点と圧倒的多数を占める。このうち101点は北区から、その中のさらに81点は内庭の灰褐色土から出土した。これに対して、精製は8点と極めて少ない。

土器群の大半を占める胴部片から大まかな器種構成を検証したところ、貯蔵用と考えられる壺甕類が多数を占め、北区で108点、東区で10点、総計118点を数えた。これは出土土器全体の72%にあたる。粗製の貯蔵用壺甕類は合わせて102点(86%)を数え、質感と器種の相関は明らかである。この他、水差し類(28点)(図7:2)と鉢類(15点)(図7:1)が見られ、大半の質感は普通に分類できる。なお、精製が水差し類のみ見られる点の特徴的である。

混和材・色調・焼成に基づき、出土土器群は大きく4種類に分類できる。鈍い橙色土器は最も一般的であり(計110点)、全ての器種で主体を占める。暗灰色／



図8 SMS24001-1 北区出土布目圧痕付土器片(内面)

黒色土器(計45点)では貯蔵用壺甕類が34点を占めており、特定器種との相関が窺える。

土器の他に、少量の動物骨と石皿片1点が出土した。動物骨については、今後専門的な分析が必要である。内庭の灰褐色土から出土した石皿片は花崗岩製と思われる、最大長124mm、最大幅67mm、厚さ25~30mmを測る。元来は長方形に近い平面形を呈しており、現存部分は端部に近い箇所と考えられる。上面には長手方向に擦痕が残り、側面は上下面からの敲打剥離により垂直に加工される。

最後に、出土土器の年代について言及しておく。口縁部片に基づく復元形態のレパトリーは、アク・ベシム遺跡等の都市遺跡において確認できるものと根本的に異なり、型式同士の比較が難しい。したがって、都市遺跡が営まれた中世(6~12世紀)以外の時期である可能性がある。これらの口縁部片に加えて、3点が出土した布目圧痕を内面に有する胴部片(図8)は、イシク・クル湖南東岸の考古学踏査で採集された鉄器時代(前8~後5世紀)の土器片と類似しており(Chang *et al.* 2022: Fig. 12)、遺跡利用年代の参考になるかもしれない。今後は類例を収集し、遺跡の文化編年上の位置づけを確定したい。

#### 4. おわりに

2025年8月の発掘調査をもって、アク・ベシム遺

跡南方の山麓部を対象とした一連の調査研究は完了した。2022年以来、ケゲティ溪谷及びシャムシー溪谷における考古学調査により遊牧関連と考えられる痕跡を多く確認したものの、土層堆積の薄さと遺物の僅少さのため、これらの遺跡の利用年代と具体的な機能については未だに不明な点が多い。今後は、天山山脈北麓における遊牧活動の通史的な動態を明らかにするために、これまでの発掘調査により出土した遺物と取得した土壌サンプルの分析をさらに進めるとともに、隣接地域における異なる立地・平面形の遺構を対象とする調査を改めて実施する機会を得られればと思う。

著者らは、JSPS21H04984 科学研究費補助金基盤研究S「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」(代表:山内和也)の助成を受けて本研究を実施した。

#### 参考文献

- ・帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2020『アク・ベシム(スイヤブ)2019』帝京大学文化財研究所。
- ・帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2021『アク・ベシム(スイヤブ)2018』帝京大学文化財研究所。
- ・山藤正敏・大谷育恵・齊藤茂雄・山内和也・アマンバエヴァ, B. 2023「天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る—キルギス共和国ケゲティ溪谷の考古学調査(2022年)—」日本西アジア考古学会(編)『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』85-89頁 日本西アジア考古学会。
- ・山藤正敏・齊藤茂雄・山内和也・アマンバエヴァ, B. 2024「天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る—キルギス共和国ケゲティ溪谷の考古学調査(2023年)—」日本西アジア考古学会(編)『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』107-111頁 日本西アジア考古学会。
- ・山藤正敏・齊藤茂雄・下岡順直・山内和也・アマンバエヴァ, B. 2025「天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る—キルギス共和国シャムシー溪谷・ケゲティ溪谷の考古学調査(2024年)—」日本西アジア考古学会(編)『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』105-110頁 日本西アジア考古学会。
- ・Chang, C., S. S. Ivanov and P. A. Tourtellotte. 2022 Landscape and Settlement over 4 Millenia on the South Side of Lake Issyk Kul, Kyrgyzstan: Preliminary Results of Survey Research in 2019-2021. *Land* 11(4): 456.
- ・Кожемяко, П. Н. 1959 *Раннесредневековые Города и Поселения Чуйской Долины*. Фрунзе, Академия Наук Киргизской ССР.